
正月

おいおいまじかよ俺ってうんこだったのかよ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

正月

【Nコード】

N9313Z

【作者名】

おいおいまじかよ俺ってうんこだったのかよ

【あらすじ】

ある青年の帰省しての心温まる親子物語。

今年も正月がやってきた。

一年で一度のちょっとしたイベント、誰もが知ってるであろうこと
だが。

テンプレとしては家族とお節を食べてこたつで温まっておしるこを飲んであつたまる。

ある理由で旅をしていてここ何年かはそのテンプレに乗っかれなかった俺だが、今年は何故か母さんの様子が気になった。

だから今年は久しぶりにこの俺が旅を始めるきっかけになった場所、
 というか実家に帰ってきた。

因みに旅の仲間は全員知り合いの所にあずけて来たから単身だ、つまり一人だ。

ふと思うがこの旅をして一人になったなんて事は殆どなかったから新鮮だ。

「次は、
■■■■■■■■■■。次止まります」

どうやら少し回想をしている間に俺の住んでいる街についたようだ。この時代にバスなんてまだ有ったのなんて思うだろうけど、ここは田舎だから例外だ。

俺は降りて少し深呼吸をする。

懐かしい空気だ、と思わず独り言を漏らす。

「あら？ ■ ■ ■ 君じゃない？」

少し歩いていると感じの良さそうなおばちゃんが声を掛けて来た、物凄く懐かしい。

近所のおばちゃんだ、名前は知らないけど子供の頃よく声を今の様な気さくさで声をかけてくれた。

「ご無沙汰しております、久しぶりに母さんに顔だそうと思って」

あらあらそうなの、とそんな感じで軽い挨拶を済ませた後直ぐに家に行こうと思っていたが実家のこの雰囲気を感じたら欲がでてきた。

今ではライバルだが昔は親友のような存在だった俺の家の真隣の家、
■■■の野郎の家のおばちゃんにも挨拶しておこうと思ったのだ。
ここは結構小さな街だから直ぐに着いた。

軽くノックをする、直ぐにトタトタと足音と声が聞こえてきた。

「はいどちら様ー？」

ドアが開く。

「お久しぶりです、帰ってきたので挨拶をしようと思って」

「まあ！久しぶり！どうぞ上がって上がって！」

「いえ、すみませんんが遠慮させていただきます。ちょっと挨拶を
と思ったけなで」

促されたが愛想笑いでそう返す、全く嫌いなわけではないけどもこ
ういうのは少し長くなりそうなのでやんわりと断っておく。

「あらそう？ところで■■■は元気にしてるかしら？」

「ええ偶にしかあいませんがいつも元気そうですよ」

「そうー？もう何年も帰ってきてないから安心したわー」

少し顔に陰が浮かぶ。

「…今度あったときにしっかり伝えときますね」

よろしくね、と少しニッコリして言ってそこで話は終了した。

あいつも親知らずな奴だ、しっかりと伝えておこうと思った。

さて、帰るか。俺の家に。

「ただいま母さん」

懐かしい匂いがする。

「あら…？連絡入れてくれれば少し位は祝えたのに、お帰りなさい」
そこから少しだけ近況報告をしていた、本当に久しぶりだというの
に殆ど違和感も無く会話が綺麗に成立していることが何故か凄く感
動して会話中に何度か泣きそうになったのは内緒だ。

そして直に晩飯の時間になる。

「晩ご飯も食べていくよ」

「じゃ晩ご飯はカレーにするわね、子供の頃大好きだったわよね」

ご飯の準備をしながら、少し陰りがあるがニッコリして微笑みかけてそう、言う。

「…よく覚えてるね、懐かしいなあ昔は毎日カレーでいいと思っていたよ」

少し冗談っぽく自嘲気味にそう言う。

実はこの時点で少し泣きそうだった、懐かしくて懐かしくて。

そこからは少しの間無言だった、でもその無言はとても心地いい物で落ち着いた時間だった。

やがて、

「カレーできたわよ」

ニッコリ笑って器を持ってきてくれる、少しぼーっとしていた俺はちよつと遅れて、

「ああ、食べよっか」

と返す。

「いただきます」

「いただきます」

ふと正月なのにお節でもなくカレーっていうのはなんか面白いな、とか思ったりもした。

そんなことを思いながら一口、口に運ぶ。

自然に涙が流れた。

久しぶりに食べた母さんの作る晩ご飯は本当に懐かしくて気づくと熱いものがこみ上げてきていた。

「おいしい」

嗚咽交じりにやっとのことですう呟く。

「懐かしいわね」

母さんもつられて泣いてしまったのか嗚咽交じりにそう呟く。

ここで俺は今しか無いと思いここに帰ってきた本当の理由を明かす。
「俺もう旅は止めようと思うんだ。ふと思ったんだ。俺もう20代後半なのにもう遊ぶかの様にずっと旅してきてさ周りの事も考えなくてさ、やっと周りに気づけた時にはこの年でさ情けなくてさ、申し訳なくてさ、俺すっかり足付けて何処かで働こうと思ったんだ。今日はそれを言いに戻ってきた」

どうにかこうにか言い切る、20代後半の男が情けないと思うがそんな事も考えず思いを伝えた。

母さんは静かに聞いていてくれた。

そして母さんは少しだけなにかを考えたような穏やかな顔をして言った。

「そう、おかえりサトシ」

「ただいま」

（後書き）

サトシ、今幾つだよ

とか考えてたらこの物語が浮き上がったので頑張って書いた

初短編、別にポケモンは好きじゃないけど

心温まるいい話を書きたかった

書けてるかどうかは保証しない

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9313z/>

正月

2011年12月29日01時47分発行